

南アジア・パンジャブ地方におけるムスリム市民社会の形成と

近代教育の関連についての検討

——イスラーム擁護協会の事例から——

平成 19 年入学

派遣先国：パキスタン・イスラーム共和国

水澤 純人

キーワード：パンジャブ、ムスリム市民社会、イスラーム擁護協会

対象とする問題の概要

英領インド期のムスリムにとって教育は、新たな社会状況に適応するために自らのコミュニティを改革するための手段であり、かつ目的でもあった。代表的な改革への動きとして、19 世紀後半におけるサイイド・アフマド・ハーン(以下、サイイド)という思想家・政治家の活動が広く知られている。サイイドの活動は、インド・ムスリムのためのモデルとなる近代的な高等教育機関を北インドのアーリガルに設立しようとしたもので、インド各地のムスリム・エリートに対し、大きな求心力を発揮した。

一方、本研究が対象とするパンジャブでは、サイイドに共鳴しつつも、基礎教育や女子教育を重視する独自の教育活動を展開する団体・イスラーム擁護協会(*Anjuman Himāyat-e Islām*、以下、擁護協会)が現れた。擁護協会の活動は、インド各地のムスリム・エリートと連携しながら、現地民衆の広範な支持のもとで展開され、かつ後にその教育モデルは他地域のムスリムに参考とされるまでになった。

研究目的

本研究の目的は、擁護協会が設立された 1884 年からパキスタンが独立する 1947 年までの英領インド期における協会の活動を通し、ムスリム市民社会が教育の推進に果たした役割を考察する事である。ムスリム市民社会とは、ムスリム間で共有可能な問題に関し関心がもたれ、かつそれについて議論される公共の場(公共圏)がある中で、より具体的な関心と目的を持った人々が集まって形成した結社の集まりを指す。本研究では擁護協会をこうした集まりを構成する一結社と捉え、その中心的な活動である教育に関し、協会に関わる様々な人々の間でどのような議論が交わされ、その結果、誰のための如何なる教育が推進されてきたのかに着目する。

フィールドワークから得られた知見について

得られた知見は 2 点ある。一点目は、英領期の擁護協会の活動に関し、一次資料(写真 1, 2)を基にした研究が可能であるという事だ。本フィールドワークは、擁護協会の活動をテーマとした初めての現地調査であり、現地の所蔵状況に応じて対象として扱える年代も制限される必要があった。今回、協会が発行していた月刊のウルドゥー語機関誌を 1880 年代後半から 1920 年代までまとめて収集することが出来、加えて 1930 年代の年次レポートと教育向け冊子、パキスタン独立以降に出版され、これまでの活動経緯をまとめた記念号も収集する事が出来た。

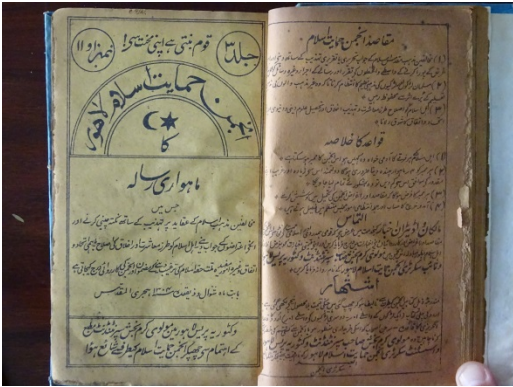


写真 1 : 1887 年発刊の初期の月刊誌

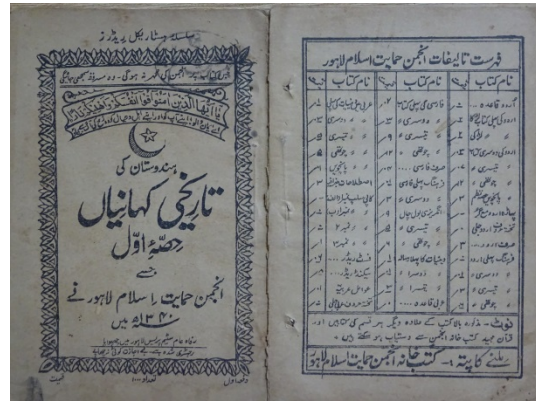


写真 2: ヒジュラ暦 1340 年(西暦 1921-22 年) 発行のインドに関する歴史物語

二点目は、英領期の擁護協会の活動を、今日までの活動経緯の中で相対的に位置づける事が出来た事だ。擁護協会の関係者や協会が設立したカレッジの教員からは、英領期の協会の活動が如何に華々しいものであったかを伺う事が出来た。インタビューに答えて下さった方々は、擁護協会がパンジャブで初めてムスリムのためのカレッジ(写真 3, 4)を設立した事や、協会の代表を高名なムスリム・エリートが務めていた事を誇らしげに語って下さった。私自身も、英領期の建物を今日まで使用している男子カレッジを訪れた際、当時としては極めて荘厳な造りに往時の勢いを感じた。



写真 3 : イスラミア・カレッジ・レールウェイ・ロード正面外観



写真 4 : 同カレッジを正門脇から望む

パキスタン独立以後の 1950・60 年代も擁護協会(写真 5)が新国家の中で一定の存在感を示していた事は、カレッジ内に新築された壮大なホールや独立後の記念号からも伺えた。しかし、多くの関係者から異口同音に聞かれたのは、1972 年の学校国有化政策で学校が接收され、擁護協会が学校との繋がりを断たれてしまった事が、活動を下火にさせる大きな要因となったという事だ(写真 6)。英領期の擁護協会は、その時代状況もさることながら、活動の勢いにおいても協会の歴史において特筆すべきでもあった。



写真 5：1963 年以降の歴代協会代表の肖像画と、建国者ジンナーをはじめとする来賓の来訪記念写真



写真 6：現在の協会本部に付設された孤児院

今後の展開・反省点

反省点は二点ある。一点目は、擁護協会本部所蔵の、英領期の議事録を収集出来なかった事だ。今回は渡航前に把握出来ていた雑誌と本の媒体による資料の収集に注力する余り、本部に残されていた議事録の重要性を見失ってしまった。他には時間切れの関係もあり、存在を確認しながら収集出来なかった資料が多く残されている。

二点目は、往時の擁護協会を直接・間接的に知る関係者へ十分な聞き取りが出来なかった事だ。帰国直前に擁護協会で活躍した人物のお孫さんに会うことが出来たが、渡航前の準備不足もあり、十分な質問を用意出来なかった。

今後の展開として、以上の反省点を踏まえ、次回渡航時により十全な資料収集を行い、1930・40年代も含めた英領期の擁護協会の全体像を掴むようにしたい。加えて、資料を補足する形で、より多くの関係者へのインタビューを行いたい。